

全校の皆さん、おはようございます。

十一月に入り、一段と寒くなってきました。

「寒さ」は、「さみしさ」や「悲しさ」、「暗さ」といった感情と結びつきやすいものです。そして「寒さ」は、人間が広い宇宙の中の「孤独」な生き物であることを思い出させます。

水曜日に強歩大会が行われましたが、強歩大会という行事の特徴は、クラス対抗ではなく、自分で自分と向き合うというところにあります。寒空の中、自分が自分一人と向き合い足を進め続ける、「孤独」な戦いと言えます。

昨年十一月に亡くなられた詩人の谷川俊太郎さんの有名な詩に「二十億光年の孤独」というタイトルのついた詩があります。

人類は小さな球の上で 眠り起きそして働き

ときどき火星に仲間を欲しがったりする

火星人は小さな球の上で 何をしてるか 僕は知らない

(或いは ネリリし キルルし ハララしているか)

しかしときどき地球に仲間を欲しがったりする

それはまったくしかなことだ

万有引力とは ひき合う孤独の力である

宇宙はひずんでいる それ故みんなはもとめ合う

宇宙はどんどん膨らんでゆく それ故みんなは不安である

二十億光年の孤独に 僕は思わずくしゃみをした

(谷川俊太郎「二十億光年の孤独」)

「二十億光年」という距離は人間にはとうてい把握しきれない距離ですが、「孤独」というものを身にしみて実感したことのある人には、「二十億光年の孤独」という詩で谷川さんが表現しようとしたことがよく分かります。

仏教では、人間は本質的に「孤独」であると見ます。『大無量寿経』に「独生独死独去独来（どくしょうどくしどつこどくらい）」という言葉があります。人間はさまざまな人との関わりの中で生活しますが、生まれてきて死んでいくという本質の部分では「独り」です。また「無有代者（むうだいしゃ）」という言葉があります。私という存在は他の誰とも代わることができません。私という存在と向き合うことのできるのは自分ひとりだけです。

火星人が本当にいるのかどうか分かりませんが、谷川さんは、同じいのちであるなら火星人も私たちと同じで本質は「孤独」だから、地球に仲間を欲しがると思います。「孤独」という人間の本質を本当に実感するなら、たとえ相手が火星人であっても「孤独なもの同士ですね」と共感でき、本当の心のつながりというものが生まれるのです。そして、それが「孤独」の寒さを包み込む温かさとなるのです。